

# 【『就』の正しい字形】

令和七年(2025年)4月16日改訂

・漢和辞典に掲載(けいさい)されている漢字は、中国の「<sup>こうき</sup>康熙字典」という漢字辞典を典拠(てんきよ)としています。「就」の字は、「<sup>だいのまげあし・おうによう</sup>尤(だいのまげあし)」という部首に属していますが、この部首に属する漢字には二つの系統があります。漢和辞典を見てみると、「尤(だいのまげあし)」という部首の項目内に、一つ目の系統として、「尤(オウ)」という字が掲載され、一方、二つ目の系統には「尤(オウ)」の右上に「点」を打った「尤(ユウ)」、「就(シュウ)」等が掲載されています。「尤(オウ)」には「まがったすね、せむし」などの意味があり、足や体に障害を負って不自由であるさまを象(かたど)った象形文字です。一方、「尤(ユウ)」は「とがめる、もっとも、とりわけ、すぐれている」などの意味をもった指事文字であり、両者の由来は全く異なっています。

・康熙字典では、第一の系統(象形文字)にある「尤(オウ)」の字は「少し右に飛び出してから下ろす」形となっていますが、第二の系統(指示文字)にある「尤(ユウ)」は「真っ直ぐ下ろす」形となっています。このことから、同じく第二の系統にある「就」もまた、第11画は「真っ直ぐに下ろす」ことになり、これを「正字」とします。

・ところが、康熙字典には、「少し右に飛び出してから下ろす」字形の「尤(オウ/象形文字)」が、「尤(ユウ/指示文字)の異体字」として別に掲載されてもいることから、「就」の字もまた「少し右に飛び出してから下ろす」字形で書いても、「異体字」としては間違いであるとは言えないのです。

※以上の内容は、大修館書店「漢字文化資料館Q&A:262」に掲載された記事に依拠しています。

・ただし、小学生の場合、6学年配当漢字である「就」は、当然異体字ではなく、第11画を「真っ直ぐに下ろして書くのが正しい」として正字を学ぶ必要があります。

※異体字:正字(標準の字体)とは異なるが、意味や発音、用法が同じであるため通用する字体。

## ■視覚的誤認について



・ゴシック体は、太く角張った線でデザインされた書体で、見やすく目立つため、見出しや広告などによく使用されています。左図(さず)のとおり、第11画の縦線が第10画に触れているだけであっても、線が太い(線幅が広い)ために右に飛び出しているように錯覚(さっかく)されます。この錯覚は、文字が小さくなるほど強くなる傾向(けいこう)にあります。左図を目から離(はな)して見てみてください。また、ラインマーカー(マーキングペン)の太字を利用して、ゴシック体を真似(まね)て3cm角程度の大きさで「尤(ユウ)」の字を書いて、錯覚の状況を自分でも確かめてみましょう。

## ■教科書体



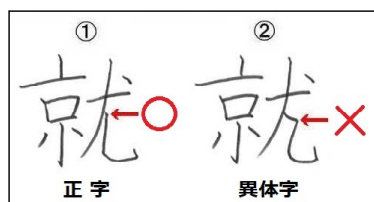
・教科書体とは、小学校の教科書で用いられ、手書き文字に近い字形をもとにデザインされている、「書く学習」のための書体です。

・「就」の字の第11画目の入筆部を見てみましょう。第10画に触れるようにして、毛筆のように斜(なな)めに太い「筆あと」がついています。しかし、よく見ると、第11画の線は決して斜め右下に長い線として飛び出してはいません。入筆部の上辺だけを見てしまうと、第11画が斜め右下に飛び出しているように錯覚されてしまいます。この錯覚は、文字が小さくなるほど強くなる傾向(けいこう)にあります。左図を目から離して見てみてください。

・第11画は、「乳」や「乱」の部首である「おつによう(つりばり)」とほぼ同じ形をしています。「おつによう」を書くときに、私たちが目立つほど右に長く飛び出して書かないのと同じことです。

※「枕(まくら)」や「沈(しず-む)」の旁(つくり:漢字を構成する右側の部分)については字源が明らかになっていませんが、ことさらに目立つほど右に飛び出して書く理由がありません。錯覚という観点から見ても同様です。

## ■【就】の正字



・小学校6年生で習う『就』の正字は①のほうですから、極端(きょくたん)に右に飛び出した②のように書いてはいけません。ただし、②は「異体字」といって、一般にはよく使用されている字形です。

